

巻頭言

インド仏教の衰退と「門徒もの知らず」

仏教文化研究所所長

河 智 義 邦

ビームラーオIIアンベードカル（一八九一—一九五六）の仏教復興運動によって、現在のインドで、少しずつ新たな仏教徒が増えてきていることは周知の通りです。遡りますと、インド仏教は十三世紀にはほとんど消滅してしまっただけという通説となっています。それは、内的な理由として、仏教が全般的にヒンズー教化され、吸収されていったことが指摘されています。この場合のヒンズー教化とは「呪術宗教化」という意味です。また外的理由としてイスラムによる破壊があったと言われています。中村元博士（一九二二—一九九九）は、仏教はもともと合理主義的な哲学的宗教であったため、呪術・魔法・迷信のようなものや火祭りなどの呪術的祭祀までも無意味として排斥したと指摘されます。そしてこうした思想はインドの民族宗教・習俗と相いれず、一般民衆に受け入れられない傾向にありました。大乘仏教ではかかる状況を打開するため、一応呪術的な要素を承認して、漸次に民衆を高い理想にまで導こうとして、陀羅尼の類が多く作られ、経典読誦の靈験や功德が称揚されていきました。それとともに民間信仰も撰取していき、その傾向は密教において絶頂に達しました。しかしそれは同時に仏教そのものが著しく変容し、かえって民衆の信じていた俗信などに抱き込まれてしまい墮落したとされます。

博士の所論は五十年ほど前のもので、以降研究も進み、例えば民間に古くからあった「パリッタ」と呼ばれる蛇よけの呪文が初期の佛教教団内で認められていたという説も登場しています。しかしながら、呪術が仏教の本義・本質であると考えられる仏教者はおられないと思います。「呪術」とは、「決まった目的を果たすために、目に見えない力を利用する一種の技術」と定義とされ、まじないとも言われます。そのベースにアニミズムやマナといった原始宗教観念があることはよく知られています。一方、縁起や無常・無我という普遍の道理に基づいて「いのちの真実（四苦八苦・人生は苦なり）」に関する認識を促し、無明や渴愛といった煩惱を克服して、迷いのあり方から真実のあり方へと「転迷開悟」することを説くのが仏教です。呪術宗教と仏教はそもそも水と油の関係にあるのかも知れません。しかし一般的には、仏教も前者の分類に入っていると考える人は少なくありません。

博士は、上記したように、仏教が呪術的傾向を強めていった背景に、仏教はもともと哲学的・合理主義的宗教で、それが民衆から離れて、独善的・高踏的態度を保つ傾向が出てきたこと、また大乘仏教においても深遠高尚な哲学や論理学を発達させたが、それゆえに民衆に広まらなかったと言われています。そこで、民衆化するために方便的に呪術的な要素を取り入れましたが、結局それに取り込まれてしまったとされます。ところで、いま述べていることは、決して呪術的宗教を批判するためのものではありません。あくまでも本来の仏教と呪術（民間信仰）には宗教としての質的差異があることを確認するためです。むしろ文化的に見ますと、特に大乘仏教はそうした要素も含めて、幅広い階層の人々の願いに応え、中国や日本において豊かな仏教文化を育んできたともいえます。

民衆化した仏教の代表の一つに浄土仏教があります。その伝統を汲

む浄土真宗の門徒に対して、「門徒もの（物忌み）知らず」という揶揄があることは有名ですが、裏返してみますと、真宗門徒が物忌み（俗信・迷信）に惑わされずに生き抜いた証しとも言えます。また、江戸時代の儒学者・太宰春台は、『聖学問答』の中で、次のように述べています。

日本の仏者の中に、一向宗（浄土真宗）の門徒は、弥陀一仏を信ずること専らにして、他の仏神を信ぜず、如何なる事ありても、祈祷などすること無く、病苦ありても呪術・符水を用いず（中略）今、純（春台）は一向宗にあらざれども、孔子を信ずること、かれらが弥陀を信ずるが如く、鬼神に遠ざかりて祈祷・祭祀せざること、全く一向門徒のごとし。

ここで春台は、法然聖人や親鸞聖人の教えを受け継ぐ（前近代の）念仏者が呪術的医療と一線を引いた生活をしている様子を好意的に論評しています。これもまた一つの仏教文化の姿と言えましょう。いざれにしても、インド仏教の歴史がたどったような、「庇を貸して母屋を取られる」ことが無いよう、呪術（呪術的思考）との距離感には注意する必要があるのです。

『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第二十号をお届けします。ご執筆賜りました諸先生方に御礼申し上げますとともに、法義相続の念をもってご高覧賜りますようお願い申し上げます。

令和二年（二〇二〇年）三月三十一日